平成 29 年度社会福祉学研究科　博士論文・修士論文要旨

修士論文

閾値下うつのストレス媒介モデルの検討

庄司文仁

近年、閾値下うつが注目されてきている。閾値下うつとは、健常とうつ病の間に存在するスペクトラムであり、うつ病のエピソードには該当しないものの、ある程度の抑うつを呈する状態をさす。抑うつが生起するメカニズムを説明したモデルにストレス媒介モデルがある。ストレス媒介モデルとは、ストレッサーを経験することで抑うつスキーマ（個人の中にある、かなり一貫したネガティブな知覚・認知の構え）が強まり、推論の誤り（特有の情報処理の仕方、あるいは思考パターン）と自動思考（半ば自動的に湧き起こる一定の考え）を喚起し、その結果として抑うつが生じると仮定するモデルである。これまで閾値下うつが生じるメカニズムの検討は不十分であった。

そこで、本研究の目的は、抑うつスキーマ、推論の誤り、自動思考、およびストレッサーを用いて、閾値下うつのストレス媒介モデルを構築し、閾値下うつが生じるメカニズムを明らかにしようとすることであった。本研究では、CES-D日本語版の得点が16点以上であり、かつM.I.N.I.でうつ病エピソードに該当しない状態であると判断された場合を閾値下うつと定義した。

大学生100名を対象に質問紙調査と面接調査を実施した。除外基準に該当した11名を除く、89名を対象に分析を行った。本研究の結果、ストレッサー、抑うつスキーマ、推論の誤り、および自動思考がどのように閾値下うつを生じさせるのかについて１つのモデルを得ることができた。このモデルによると、対人ストレッサーと物理・身体的ストレッサーは達成動機を高め、大学・学業ストレッサーは達成動機を抑制する。達成動機は推論の誤りと否定的自動思考を媒介して閾値下うつを生じる。推論の誤りが閾値下うつに影響する効果は部分的に否定的自動思考に媒介される。また、大学・学業ストレッサーは、達成動機を媒介せずに、推論の誤りと否定的自動思考を強め、結果として閾値下うつを生じる。本研究の結果から抑うつスキーマ、推論の誤り、および自動思考という認知的変数を介入のターゲットとする理論的な根拠を提示できた。